

1 1 月総評

西躰 かずよし

雪が降る
楷書のように

吉沢 美香 宮城県

楷書というと習字の時間を思い出す。書く順番、止め、はらい、はねなど、はじめからそこにあったかのような折り目の正しさ。でもそれは息苦しさとは別のものだろう。清廉な作品。雪が溶けて木から落ちる音までも聴こえてくるようである。

ゆっくりと首を絞められ蝶凍る

辻村陽翔 北海道

蝶が凍るといふ。それはどんな時かと思う。書き手は首を絞められる時を想起している。『ゆっくりと』という一節に親近感を持つ。確かに一瞬で凍ることはあまりない。次第に凍っていく。首を絞められるように。

冬の蝶 すべての机上に花瓶あり

玻璃 愛媛県

不思議な風景。ただ恐ろしい風景にも思えてくる。『すべての机上』というのがこの作品の鍵になるのだろう。それらは冬の蝶の供物として差し出されるものであるかのように見える。

ころころ、ぽて。
おひるの、どんぐり。

あいな 東京都

どんぐりはどんぐりでも、お昼のどんぐりで、それが作品に息を吹き込む。お昼のどんぐりがあるなら、夜のどんぐりも、夕方のもあると思えるから。もうあなたは、どんぐりと友だちになっているかもしれない。

やわらかい銃声がして月曜日

小宮 颯人 東京都

銃声は通常やわらかいものではないだろう。でもそれを敢えて『やわらかい銃声』と書いた点に惹かれる。また来る休日のあとの月曜。日常のなかの閉塞感を上手くとらえている。

Enter キー

ヒールが折れた夜の音

花野 木春 東京都

パソコンで Enter キーをたたく音のことだろうか。それが『ヒールが折れた夜の音』のように聴こえたのかもしれない。ただそれだけのことだけれども、確かな喪失感がそこにはある。

もう乗れない電車のなかで抱抱く

雲理そら 大阪府

『もう乗れない電車のなか』だから、いまは電車に乗っているのだろう。逆説的な書きぶりにおいて登場人物の現在が強調される。彼女（もしくは彼）が投げ出されているのは、もう二度と乗りたくはない電車の中なのだろう。だからこそ抱を抱くことしかなかったのだろう。そして、どうして乗りたくないのかは読者に委ねられている。

僕の死後不死の薬を手にしても
君にはちゃんと死んで欲しくて

中原紘 山口県

相聞歌にも読める。ちゃんとした死は、ちゃんとした生にあってはじめて可能となる。だからちゃんと死んでほしいと願うのは自然なことに違いない。劇的なのは、自身の死後、不老不死の薬を手にしたとしてもきちんと死んでほしいと思っている点で、そこで生は相対化される。佐野洋子の絵本『100万回生きたねこ』を思い出す。

パイナップルが
乗ったピザが好きなこと
まだ吉田にしか言ってないこと

平山 東京都

「まだ吉田にしか言っていないこと」とぶっきらぼうに言っているけれども、それが登場人物にとってどれだけ重要なことかは、ここでは言わないでおこう。ただその人だけには伝えたいということがあって、その人だけにはわかってほしいということがある。でもそれがどれだけ傲慢なことかも、書き手はすでに分かっているのかもしれない。

2限かもしれなかった3限

段波 兵庫県

そうであったのかもしれないということに気づいた時点で、それは信じられるものではなかったのかもしれない。あのときいなくなったのが、なぜ私でなくてあなただったのか。事故に遭ったのが、なぜ私でなくてあなただったのか。僕たちに、そうした偶然性を受け止めることはできない。だから書き手は、生まれてくることのなかった2限目への追悼を、短いつぶやきへと託したのだろう。

セーラー襟の下に手を入れる
かもつれっしやみたいな青春

迷迭香 大阪府

青春を貨物列車に喩えているのが見事だと思う。明るさとか、暗さとかとは無縁で、行き先もあいまいなまどこかへ運ばれていくような気持ち。漠然とした未来への期待や不安をこれほど、うまく言い当てることばはないだろう。

また、前半部の『セーラー襟の下に手をいれる』という何気ない日常の所作が、後半部分をより生きたものになっている。